

1. 中夜久野地区公民館における調査成果報告会

はじめに

末窯跡群の調査にあたっては、高内、末、日置の三地区に対して事前に許可をいただき、ご協力を仰いできた。そのため、成果の報告についてもまずこれら地元の地区を対象としておこなうこととし、2023年3月11日に「ここまでわかった！うつわの里 中夜久野」と題する報告会を中夜久野地区公民館において開催した。福知山市文化・スポーツ振興課とも協働し、主催は京都府立大学文学部歴史学科・福知山市教育委員会である。

1. 報告会の内容

報告会では、まず文学部歴史学科考古学研究室の学生が、スライドを用いてこれまでの調査について報告をおこない、調査に参加した学生の目線で遺跡や遺物の重要性を伝えた。プログラムの順に記載すると以下の通りである。

(1) 長者森古墳と太田森2号墳の出土品の再整理

夜久野町化石・郷土資料館に出土資料が所蔵されている古墳の資料について、古い記録も参照しながら、最新の実測図を作成し、それら資料の再評価をおこなったことを報告した。この間、出土地が不明になっていた資料の帰属も明らかになり、地域を代表する古墳の年代を決定できるなど、資料館の展示物の価値を高めることができた。

(2) 末窯跡群の踏査成果

須恵器の窯跡について解説したのち、夜久野末窯跡群の分布について、牧川北岸、牧川南岸東地区、同西地区の3地区に分けて解説をおこなった。荒れた山中を歩く困難さや、新たに窯跡を発見した喜びなど、調査時の思いを伝えることができた。100基以上の窯跡が存在する屈指の窯跡群であることを示し、地域に重要な文化財が眠っていることを伝えた。また、採集した木炭からは当時の環境を知ることができるという新たな研究についても言及している。

(3) 夜久野町化石・郷土資料館から借用した遺物や森林植生学研究室のポスター展示

上述した長者森古墳や太田森2号墳の出土須恵器を借用し、休憩時間を中心に展示し、学生が解説をおこなった。また、京都府立大学生命環境学部森林植生学研究室の佐々木尚子講師が夜久野末



写真1 成果報告会の様子



写真2 長者森古墳見学の様子

窯跡群においておこなったボーリング調査について、ポスターを用意してその成果を解説した。なお、(1)と(2)についてもポスターを準備し、それぞれ学生がついて解説をおこなった。

(4) 三次元データによる古墳の復元

展示解説と同じ時間帯を利用して、別室において三次元データを用いた古墳の復元のメニューを実施した。京都府立大学文学部共同研究員の仲林篤史が中心となって用意したもので、iPadを用

い、ヴァーチャルな石室を体感するなど参加者に楽しんでいた(IV部2章参照)。

(5) 成果についての座談会

その後、この研究に参加した教員等がパネラーとなり、それぞれの成果を語り合う座談会を実施した。パネラーとして、文学部歴史学科の諫早直人准教授、共同研究員の仲林篤史氏、生命環境科学研究科の佐々木尚子講師、そして在野の考古学研究者である東昭吾氏、福知山市から文化財保護審議会会長の小滝篤夫氏、文化・スポーツ振興課の松本学博課長補佐、鷺田紀子主査が並び、文学部教授の菱田哲郎が司会を務めた。議論では、調査から中夜久野の古墳や末窯跡群の重要性がますます確認できたが、そのものがまだ途中であり、文理融合での調査がさらに必要であることを確認した。そして、文化財としての価値の高さが裏付けられたことから、末窯跡群の保存活用を図っていく必要性が話し合われた。会場内の参加者からも多くの質問、発言があり、地域の古墳や末窯跡群に対する地域の関心の高さがうかがえた。

2. 長者森古墳の見学

中夜久野地区公民館での報告会が終了したのち、近くにある長者森古墳(京都府指定史跡)を学生の案内で見学するプログラムを実施した。旧育英小学校の校庭に位置しており、地域ではよく知られた古墳である。今回は説明を聞きながら横穴式石室の内部を見学する形をとっており、丹波最大級の横穴式石室を知るよい機会になったのではないかと思う。近くで産出する玄武岩を用いた石室であるといったことにも、地域の方々の関心を持ってもらえた。同時に、こうした遺跡の活用方法についても直接に意見を聴取するよい機会となった。

おわりに

この報告会には約40名の参加があり、その半数以上が地元の中夜久野地区からの参加であった。小さな会場が一杯になり、活発な意見交換ができ、地域の文化財の重要性を認識するよい機会になった。夜久野末窯跡群の保全や夜久野町化石・郷土資料館の活用など、今後の取り組みにつながる重要な一歩になった。

(菱田哲郎・守田悠)

編集後記

本書の執筆・編集には、筆者含めた学生も少なからず携わった。思えば初めて末窯跡群の踏査に参加した時は、山の中で右も左もわからず先輩の背中にひっついていき、落ちている土器に夢中になっていた。後輩を先導する立場になると手元の地図と睨めっこしつつ、採取した土器の記録や、整理作業の日程を考えた。夜久野では先輩方の歩みも蓄積しており、私自身も他分野の先生方との合同踏査や資料の分析、成果報告会の開催などの得難い経験をした。その成果をこうして1冊にまとめ上げる段階に関わることができたことは感慨深い。多くの人と関わり、貴重な資料に触れる機会を得たことに感謝したい。(も)

表紙・裏表紙写真

上左：夜久野末窯跡群の調査風景

上中：長者森古墳

上右：ボーリング調査風景

下：夜久野末窯跡群の遠景（ナゲ地区）

(以上、菱田撮影)

裏表紙：小倉田古墳出土双龍環頭大刀

(栗山雅夫氏撮影)



京都府立大学文化遺産叢書 第28集

夜久野の後期古墳と末窯跡群

編集 菱田 哲郎 (京都府立大学文学部教授)
諫早 直人 (京都府立大学文学部准教授)
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5
発行日 2024年3月29日
印刷 北斗プリント社
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2